

詩篇93篇

《神の栄光》

- 1 主は、王であられ、みいつをまとしておられます。主はまとしておられます。力を身に帯びておられます。まことに、世界は堅く建てられ、揺らぐことはありません。
- 2 あなたの御座は、いにしえから堅く立ち、あなたは、とこしえからおられます。

《敵対者の騒ぎ》

- 3 主よ。川は、声をあげました。川は、叫び声をあげました。川は、とどろく声をあげています。
- 4 大水のとどろきにまさり、海の力強い波にもまさって、いと高き所にいます主は、力強くあられます。

《永遠の聖さ》

- 5 あなたのあかしは、まことに確かです。聖なることがあなたの家にはふさわしいのです。主よ、いつまでも。

詩篇93～100篇は「王としての神」について歌っている一連の詩篇と言われます（94篇は例外）。今日はその第一詩となりますが、全体的な印象としては、この中で詩人の願いは一つも語られておらず、ただひたすら王なる神の主権が歌い続けられています。日々忙殺され、この世の悪しき現実を見てうなだれている人は、ぜひ音読してみるべき秀作です。

聖書や讃美歌によく出てくる「みいつ」（1節）という言葉は、漢字では「御稜威」と綴られ、「稜威」とは「神聖であること」を意味します。そのところから、神の「栄光」を指していると考えられてよいでしょう。しかし、「栄光」ということばは意外と説明が難しく、子どもから「栄光ってなに？」と聞かれるとハタと困ってしまうことがあります。子どもに対しては「神様のすばらしさのことだよ」などと説明してきましたが、もう少し正確に言うならば「神の恵み、善、あわれみ」を指し（聖書辞典、新教出版社編）、罪人の目には聖すぎて見ることのできないものです。今や人の目には神の栄光は見えなくなっているのですが、その現実を理解するために、人間にはもはや神の創造の美の本質が分からなくなっている点を取り上げてみるとよいでしょう。人工的な光によって星はほとんど見えず、動植物の生態系は乱れ、著しい環境破壊が進んでいます。これらのことが人間の罪によってもたらされているのであれば、「神の栄光が見えない」のは言わば当然のことと言えないでしょうか。

しかし、詩人は見えなくなった神の栄光を尚も高らかに賛美するのです。1節では「まとしておられます」が2回繰り返され、「身に帯びておられます」と畳み掛けられます。神が栄光の衣を着ておられるようなイメージでしょう。光り輝く白い衣といえば、ヘルモン山で姿が変わり、神の子の栄光が隠せなくなったしまった主イエスの姿を思い出します（マルコ9章）。また、黙示録でヨハネが見た幻のうちにも、「その頭と髪の毛は、白い羊毛のように、また雪のように白く、その目は燃え

る炎のようであった」という「人の子」が登場します（黙示録1:13-14）。ここで詩人が思い描いているのは、神に敵対する者がどんなに破壊行動を続けても決して奪うことのできない神の栄光です。それは「尊厳」と言ってもよいでしょう。被造世界には神の尊厳が満ちており、それはどんなに壊されても再生を続けていく神の御業によって静かに表されています。自然の不思議な再生力は、焼け野原になった土地をも長い時間をかけて回復させていきます。また、人間一人ひとりの体には100人の名医がいるとも言われます。神が創造された秩序は「**堅く建てられ**」ているのです。

3～4節では「川」「**大水**」「**海**」などの「水」と関係のある表現が連出しますが、これらはいずれも氾濫することから、混沌の代名詞でもありました。ここでは、世界に勢力を増し加える大国を表していると思われます。いつの時代にも、経済大国、軍事大国が世界を支配してきました。神の創造の業が破壊される中心となるのも、力ある国ではないでしょうか。しかし、詩人は言います。どんなに大国が栄え、神に反逆する声を挙げたとしても、神はそれ以上に強くあられると。

「**あなたのあかし**」（5節）とは、聖書に書かれている神の約束の全体を指すことばでしょう。究極的には神が世を治めおられるということを、詩人は信じてやまないのです。この世界は「神の住まい」（**あなたの家**）であり、やがてすべてが元どおりに造り直され、二度と汚されることのない日が到来する。詩人がどこまでの認識をもってこれを語っているかは不明ですが、ここには最後の審判と新天新地の展望があります。そして、その日が到来した暁には、聖徒たちにも栄光の衣が着せられるのです。いえ、その衣は既に主イエスを信じる人に先取りの着せられているのです。

- ・ その教えとは、あなたがたの以前の生活について言うならば、人を欺く情欲によって滅びて行く古い人を脱ぎ捨てるべきこと、またあなたがたが心の霊において新しくされ、真理に基づく義と聖をもって神にかたどり造り出された、新しい人を身に着るべきことでした。（エペソ4:22-24）
- ・ 自分の着物を洗って、いのちの木の実を食べる権利を与えられ、門を通して都に入れるようになる者は、幸いである。（黙示録22:14）

私たちも言いましょう。「いにしえから」「とこしえから」「いつまでも」と。